

三菱ガス化学株式会社「2024年度第1四半期決算説明会」質疑応答要旨

日時：2024年8月7日(水) 18:00～19:00 (ウェビナー/電話会議)

説明者：取締役 常務執行役員 経営企画管掌、CSR・IR担当 / 北川 元康

(本資料に関する注意事項)

本資料については、上記説明会での質疑応答について、加筆・修正を加え、当社の判断で簡潔に纏めたものであることをご了承ください。また、説明会資料同様、記載されている計画、目標等の将来に関する記述は、説明会当日現在において当社が入手している情報及び合理的であると判断する一定の前提に基づいて判断したものであり、不確実性を内包するものです。実際の業績等は、様々な要因によりこうした将来に関する記述とは大きく異なる可能性があります。

Q1: セグメント利益の四半期推移について、機能化学品が前期4Qから今期1Qで45億円の増益と大幅に改善している一方、1Qから2Qは30億円の減益となる見通しのため、主要な製品、事業の動きを伺いたい。

A1: 4Qから1Qにかけて、光学樹脂ポリマーの販売増及びエレクトロニクスケミカルズ(エレケミ)、ポリアセタール(POM)等全般の需要回復で増益となった。BT材については、一部の用途での需要回復が遅れているため4Q並みとなっている。1Qから2Qにかけては、ポリカーボネート(PC)やPOMにおいて採算が悪化することや、定修差もあり、営業減益を見ている。一方、BT材、OPEは、引き続き増販していく見込みで増益を見ている。

Q2: 中計で成長を見込まれているICT3事業であるエレケミ、光学材料、電子材料について伺いたい。BT材やAIサーバー向けOPEの動き、またエレケミは需要としては本格回復に至っていないと思うがHBM向けのハイブリッドケミカルズのミックス効果や値上げの効果等、地域的な強弱感等もあれば補足いただきたい。

A2: BT材は1Qからの回復を見ていたが、業界の中で本格回復は7月以降と言われていたこともあり、結果的に1Qは4Qとほぼ同等程度の仕上がりとなった。4Qから大きく落ちたわけではない。2Qおよび下期にかけては、受注状況からみても今回修正した上期予想の確度は高いと見ている。エレケミは、この1Qで半導体市場全体が回復基調になったことを確認できたと思っている。スマートフォン、AIサーバー等の分野が牽引する中、全体で見ると4Qから増益となった。特に韓国においてはご指摘のAIサーバーに使われるHBM向けの薬液の出荷が好調。国内でも九州で新しいFabが立ち上がり、当社からの超純過水の出荷も順調である。一方で米国子会社は引き続き低調に推移しており、顧客の稼働が高まる兆しはなかなか見えてこない。

Q3: エレケミはかなり利益のベースが上がったように見えるが、価格改定やミックス改善で引き続きこの水準が可能と理解して良いか。OPEはQoQでは大きな変化はないと思うがYoYでは高い伸びになるのか。

A3: エレケミは価格改定というよりも、当社がハイブリッドケミカルと呼んでいる薬液がHBM向け等、韓国で増えており、従来の超純過水がベースであったところに対して、プロダクトミックスが改善しているということが要因。OPEは、期初予想はやや保守的という説明を前回したが、1Qも堅調。

Q4: そうするとOPEは、上方修正になったイメージで合っているか。

A4: 大きな予想の見直しをしたわけではないが、ご認識のとおり。

Q5: 不採算事業、すなわち中計における重点管理事業のキシレン分離誘導品について、1Qではまだ状況は変わっていないと思うが、1Qの為替水準であれば高純度イソフタル酸(PIA)の市況があれだけ悪くても、もうキシレン分離誘導品が悪さをしないようになっており、それゆえに対前年同期比で芳香族化学品セグメントが、JSPが連結対象外となっても同水準の営業利益になっていると理解していいのか。また、もしこれがサステナブルであるならば、市況の改善及び多用途化に伴う3年後のPIA向けメタキシレンの減少等により、芳香族化学品でも経常的に対売上高経常利益率が1割を超えるような水準が期待できると思うが、いかがか。

A5: PIA については短期的に見て一息つけているというところ。競合環境は依然厳しく、サステナブルかというややはりそうではないと見ざるを得ない状況。中計でも説明の通り、方向性としては誘導品を育てていき、役割を終えたと判断した時点で PIA は縮小していく方向性に変わりはない。タイムスケジュールがまだ中々見通せないが、芳香族化学品は高付加価値の化学品に脱皮していく方向性を堅持しているということ。

Q6: 方向性はもちろん堅持かと思うが、1Q の為替水準であれば PIA はあまり悪さをしない形にできているとの理解でよいか。誘導品の拡大、及びメタキシレンの外販拡大等にも期待している。

A6: 残念ながら必ずしもそういう状況ではなく、今期 1Q の為替水準でもまだ赤字解消にはならない。ただ、赤字幅は縮小しておりすれすれのところまでは来ているが、定修費負担なども考慮すると年間ではまだ赤字が残る状況。

Q7: 旧機能化学品セグメントの 1Q 実績が大幅な増益になった背景、及び 2Q 予想が QoQ で減益になる背景について、より詳細を伺いたい。

A7: 1Q 実績は、前期 4Q と比較して 42 億円の増益で、光学樹脂ポリマーとタイの POM がほぼ同等の増益効果。その他の事業についても悪くなったものはほぼなく、例えば、中国の PC 子会社も引き続き黒字を堅持している。一方で 1Q から 2Q にかけての減益要因だが、一つは定修差。また光学については 1Q の受注が非常に旺盛だったが 2Q ではやや落ち着く見通し。タイの POM についても固定費増や輸送費高騰、売価下落等により減益の予想。加えて、PC 子会社である三菱エンプラもいくつかの要因が重なり減益で見ている。

Q8: 光学樹脂ポリマーの出荷は、既に弱まりはじめているのか。

A8: 好調さは当面維持できると見ている。月次数量に比較的ブレのある製品であり、2Q は 1Q 並みとまではいかないだろうと見ているが、以前起きたような在庫の大きな取りだめ等はなく、安定した受注の中での見立てだご理解いただきたい。

Q9: 無機化学品も 2Q は 1Q 対比で減益予想とのことだが、固定費増等によるものか。

A9: 無機化学品は関連する国内の 3 工場（鹿島、山北、四日市）の定修が重なることもあり減益予想。但し、販売面については 2Q 及び下期に向けてむしろ回復してくると見ており、あまり心配していない。

Q10: エレケミについて、1Q はハイブリッドケミカルが好調であったこと、2Q は定修が集中することを説明いただいたが、下期の見通しについて教えてほしい。アメリカ、韓国といった規模の大きな拠点の定修のタイミング、また販売ミックスの改善についてはハイブリッドケミカルだけによるものなのか、それ以外にもプラス効果を見込める製品はあるのか、下期の見通しについてももう少し詳しく教えてほしい。

A10: エレケミの下期については前回予想と比較すると、増益を想定している。地域ごとの需要に濃淡があり、アメリカを弱く見た一方、韓国を強く見ている。定修については、超純過水、超純安水、ハイブリッドケミカルだけ製造する工場には大きなコスト負担はない。ただ、鹿島や四日市には他の製品もある中で一定程度の定期修繕のコストを負担しなければならない。販売ミックスの改善については、ハイブリッドケミカルと超純過水のウエイトの変化が大きい。

Q11: 光学樹脂ポリマーの 1Q の伸びを教えてください。

A11: YoY、QoQ、いずれでも増加した。特に YoY では大きく落ち込んだ前期と比べると数量ベースでほぼ倍増となった。販売好調の背景にはカメラの高機能化、高画素化、CMOS センサーの大型化といった要因があり、より高機能なグレードの受注が増加している。

Q12: 1Q の機能化学品事業部の増益は、光学樹脂ポリマーの寄与が大きかったという理解で良いか。

A12: YoY で見ると、旧機能化学品事業は 67 億円の増益となったが、その中でも特に光学樹脂ポリマーの寄与が大きかった。QoQ ではタイの POM や無機が好調であったが、光学の寄与も大きかった。

Q13: 今回の予想での光学樹脂ポリマーの伸びについて、上期と通期、それぞれ教えてください。

A13: 1Q 実績を含めた上期が前回予想と比較して好調であった分を上乗せして、通期での増益を見込む。但し、機能化学品事業全体としての増益がそこまで大きくない背景には、PC 事業でマイナスを見込むため。U&P 事業とそれ以外の事業で差が生じていることを、我々経営陣としても痛感している。

Q14: OPE について、前期 4Q 時点ではかなり保守的なトーンだったが、今回はそれよりは強めのコメントと理解した。これについては前期 4Q 時点の前提が保守的だったのか、今期 1Q の実態が御社が見ていたよりも強かったのか、その背景について整理して欲しい。

A14: 1Q の結果だけを見ると、少し保守的だったかもしれない。ただ 2Q、下期は不透明な部分があるので、期初予想は見直していない。また、当社の素材を使用しているマザーボードメーカーの競合状況にもよる。OPE については BT 材料とはバリューチェーンの構造が異なるのでそこも慎重に見ている。

Q15: OPE における今期 1Q の売上高の YoY 及び QoQ の変化率を教えてください。

A15: YoY では約3割程度の増加で、QoQ はあまり変化していない。

Q16: エレケミは、前期 4Q から今期 1Q、2Q へと、継続して回復基調が続く予想と理解した。販売動向について、地域別ではどのようなイメージか補足説明いただきたい。

A16: まず国内は、半導体製造メーカーの新 fab 向けに販売を開始しているとともに、今後計画される新 fab の増強に向け、生産能力の増強を含め検討を進めており、更なる成長が期待できると考えている。韓国は、これまでの半導体不況下でも超純過水で一定の需要を確保してきたが、近年は HBM 向けのハイブリッドケミカルの需要も加わり、今後も堅調に推移すると予想している。北米は、主要顧客が低調であるが、他社が北米で計画する新 fab への供給についても我々に引き合いをいただいております。顧客の分散によって補っていく。

Q17: 韓国のエレケミについて、通常の DDR5 との比較で、御社のハイブリッドケミカルが HBM で使われる必要性が出てきた背景は。

A17: 詳細説明は控えたいが、後工程も WLP といった先端パッケージ材の開発が活発化しており、また後工程と前工程の融合した領域が出てくる中、当社は従前から両工程向けに薬液を供給してきたという実績があり、ビジネスチャンスだと捉えている。

Q18: 今年度は無機化学品関連で大きな増益を見ているようだが、ハイブリッドケミカルの増益効果は相応に大きいという理解でよいか。

A18: その理解でよい。正確に言うと、依然として需要の弱い北米向けの落ち込みを補ってくれている。中計でも大きな数字を掲げている中、韓国向け等で新たな需要が伸長しているのは有り難いことだと思っている。

Q19: 持分法利益について、メタノールの市況を鑑みればもう少し利益が出てよかったのでは。サウジ JV 関連で円安による為替差損が出ていると思うがその金額や、各拠点の稼働状況について教えてください。

A19: 拠点別の数字は非開示。但し濃淡はあり AR-RAZI に出資をしている日本・サウジアラビアメタノールは、ご指摘の通り円安になると外貨建ての債務の為替差損が出てしまうため、今回も持分法利益にマイナスとして計上されている。差損の金額については具体的な言及は避けたいが、1Q は数億円というところ。ベネズエラ、ブルネイは利益が出ているが、4JV をトータルすると打ち消し合い、かつてほどの利益にはなっていないのが実情。

以上